
ピポット

びお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピポット

【Nコード】

N9371Q

【作者名】

びお

【あらすじ】

時は2×××年。ロボットと人が共存する世界となっていた。人型ロボットを人々はピポットと呼んだ。大学4年生の佐倉由衣果（なほくみゆい）はピポットの心理について論文を書くつもりでいた。そんな時、教授のツテで感情を持つピポットの試作品と出会うことができた。しかし、そのピポットは知識は持っていても、まだ感情を理解することはできていなかった。そこで開発者に「感情を教えてください！」と頼まれて・・・

なぜこんなことか・・・(前書き)

初めまして(^ v ^) びおです。

処女作で読みにくいとは思いますが、温かく見守ってください。

なぜこんなこと・・・

なぜ、このようなことになったのだろうか・・・。
佐倉由衣果さくらゆいは後ろを振り返り大きくため息をついた。

春休みも終わり、由衣果の受けた講義があつたため大学に来ていた。大学に入って見るのはもう四回目となつてしまつた桜を眺めつつ、後ろできよるきよるしながらと歩いてくる人物を待った。

「いつくん、置いてくよ。」

由衣果がその声を掛けると無表情で駆け寄つてきた。追いつくや否や由衣果の袖をぎゅっと握る。そんな彼のしぐさに思わず笑みがこぼれた。

「ごめんごめん。先にいたりしないから大丈夫だよ。」
すると彼はこくりとうなずき、手を離れた。もう大丈夫かなと思ひ、由衣果はまた慣れた道を歩きだした。彼もそれに合わせてついていた。

なんだか、親鳥になつた気分。

親鳥というのもあながち間違いないのかもしれない。彼にとつてココは未知の世界で、頼れるのは由衣果しかないのだから。そう思うと私が守らなきゃという責任感が芽生えた。歩くスピードを落とし、堦イチと並んで手をつないでみた。堦はびくつと反応はしたが、何も言わず手を軽く握り返してきたのだった。

ああ面倒くさい。

由衣果ときは手をつないだまま、由衣果が受けたい講義の教室にむかった。

ドアを開けると200人くらい入れる教室にまだ数人しか座っていない様子だった。

どこに座ろうか・・・前の方だと注目されるしな
まあ注目されるのはきだけど・・・。

由衣果が悩んでいると、後ろから声を掛けられた。

「由衣果！！ちょっと私なんにも報告受けてないんだけど、どう
いうこと?」

説明してもらいましょうか、といじる気満々の笑みを浮かべながら、
ぼんと肩に手を置かれた。

はあ。と心の中でため息をつく。あくまで心の中でだ。親友だから
全部あらいざらい話さなきゃいけないなんて面倒くさい。たとえ恋
人とかそういう事情でなくてもだ。そうは思うが、話さないわけに
もいかない。うわべであれ、「つきあい」というものは人間には大
切なことなのだ。

「ごめん恵理ちゃん、実は昨日あったばかりのことで今日話そうと
思ってたんだよ。」

「昨日!? 会ったばっか?? じゃあ一目ぼれ? 彼イケメンだもん
ね。」

「あゝそういうのじゃなくて・・・」

「手をつないでカップルじゃないってどういうの??何?何なの??」

「ちよつと恵理ちゃん、落ち着いて・・・」

恵理は由衣果が曖昧に話すのが気に入らないらしく、勢いに任せて問い詰めてくる。

その声が、大きいせいか周りの人たちも何事かと気になっているようである。

ああ、面倒くさい。人とは当たり障りなく接するのが楽なのに!! 注目を浴びたくないのに!

もう一度心のなかでため息をつき、壱のことを説明することにした。が、面倒なので壱に任せてみた。何事も実践だよね! (言い訳)

「いつくん、自己紹介できる?」

壱は由衣果の顔を見つめ、こくりと頷いた。

ああ面倒くさい。(後書き)

いっくんまだしゃべらせてない・・・OTL
次回やっとしゃべります。

あれ、ピポットも説明してないや(´・`・;)

自己紹介

「感情・・・発達・・・ピポット1号・・・です。」

「えっ!!!?この子ピポットなの!?!」

杏の答えに驚いた恵理の声で周りもまた同じように驚いているようだった。しかし、驚くのも無理はない。ピポットはまだまだ一般には普及しておらず、大学になどいるはずもないからだ。

「ピポット」というのは人型ロボットのことである。科学技術が発達するにつれ、ロボット達は進化し続けていった。最初は2足歩行のできるロボット。次は走ることできるロボット。その次は・・・と研究を続けていくうちに遂に人間に近いロボットがつかれることができるようになったのであった。そして人間よりも能力の高いロボットがつくられ、様々な場所で活躍し始めていたのである。

由衣果はみんなの驚く顔を眺めている杏を見上げ、納得のいかない顔をしていた。

もう、ちがうでしょ。昨日教えたよね。

「いっくん、自己紹介するのは名前言うんだよ。」

「あっ……」

「はい、もう一回。」

「……名前……No.001（ナンバーゼロゼロイチ）……
です？」

これでいい？といった風にきき首をかしげ由衣果の方を見つめてきた。

「だーからー……違っつて！なんだその名前は！！」

「某アニメサイーグ009のパクリか！？」

「それともホストか？？」

「どっかの電話番号ですかー！！！！」

「由衣果は自分なりに一生懸命考えた名前を言ってくれなかったことが、ショックだった。」

「もちろん、こんな名前を最初に与えた研究者に対しても怒りを覚えていたが、それ以上に名前と言われてそっちを言ってしまうきに怒りを覚えた。」

「き。あなたはきでしょ。」

「少し声が低くなってしまったのは至極当然だと思った。」

「きも少しは怒ってるのに気付けばいいんだと思いつつ言った。きはそんな由衣果の気持ちに気付いていないのか……ただ、こくりと頷き、」

「そう・・・きです。・・・由衣果にはいつくん・・・呼ばれます。」

「いつくん、よろしくね。私は由衣果の友達の理恵よ。」

どうやら思い出してくれたらしい。

その言葉を聞き、由衣果は自然と笑みがこぼれたのであった。その後、いくつか理恵がき質問を投げかけていたが、その一つにきはゆっくりではあったが答えていった。

その間、きは相変わらず、無表情だった。

昨日はあんなに無邪気な笑顔を見せたのに・・・

二人をそのままにしておいて、由衣果は席に座った。

きと理恵のやり取りを、見ながらきの笑顔を思い出していた。

きっかけ1 (前書き)

毎日更新している暇人です)。。(笑
読んでくれている方、本当にありがとうございます。

きっかけ1

そもそもきっこうして過ぎすきっかけとなったのは、一本の電話であつた。

ジリリリリン、ジリリリリン。

由衣果の携帯の着信音が鳴り響く。昭和の頃にあつた黒電話の音だ。なんとなく、心地よく思いダウンロードしてしまった音である。流しりの音楽を着信音にしている友達には不評だが気に入っている。しかし、いくら気に入っていると言っても、朝の5時になると忌々しい目覚ましの音にしか聞こえない。

誰だよ、他人の迷惑とか考えずに電話してくる奴は！！
ぼんやりとする頭で考えながら、「んー」と体を伸ばし携帯を手さぐりで探す。

「あつたあつた。んもう！本当にいつたい誰なのよ。」
睡眠を邪魔されいらした様子の由衣果であつたが、画面を見た
とたんに固まってしまった。

着信 あきやまひでひと 秋山秀人

「げっ……」

電話の主は由衣果のゼミを担当している秋山教授だつた。

電話が切れてはまずいと思ひ慌ててボタンを押した。

「はい。佐倉です。おはようございます教授。」

「やあ、おはよう。爽やかな朝だね。」

「フフ、そうですね。春休み最終日はのんびり過ごそうと思っていたのに、朝の5時に誰かに起こされて本当に爽やかな朝ですね。そんな爽やかな朝に何か御用ですか？」

嫌みの一つでもいってやらないと気が済まない。何が爽やかだ。

「おいおい、そんなこと言っていーのか？優等生。お前いつもみんなの前でそんな態度じゃねーだろ。」

どうやらあちらもやっと本性を表したようだ。口調が違う。

由衣果はいつも他人とは一定の距離を保つようにしていた。できるだけ、大人しく、当たり障りなく接していれば面倒なことに巻き込まれることもない。猫かぶりといってもいいだろう。誰にも気づかれず4年間上手くやってきた。しかし、同族にはそのうさんくさい演技がどうやらばれるらしい。秋山は同族だったのだ。

「いいえーそんなことないですよ。教授こそ大丈夫ですか？教授にしては若いもんだから女子大生に、きゃーきゃー騒がれつつもそんなこと興味ありませんよーみたいな顔したいいつもの似非スマイル紳士はどこにいったんですか？」

長ゼリフを嚙まずに言いきった。

秋山教授は30代後半にして、由衣果の大学の教授であった。黒髪でいつもスーツをビシッと着こなしている。高校教師に見えなくもない。そして、鼻筋がしゅつとしていてとてもきれいな顔立ちをしているためか、20代に見えなくもない。背は180くらいというモデル体型をしているため、女子大生が騒がないわけではない。あわ

よくば、先生とお付き合いしたいという下心をもった生徒を由衣果は何人も見てきたが、秋山は当たり障りのない言葉と極上のスマイルでかわしていくのだった。

同族であることは秋山の笑顔を見て、由衣果もすぐに気付いたため互いに本性を隠すことがなくなっていたのだ。

「てめえ、言いたい放題いやがって・・・っとそうじゃねえ。お前に用事があんだよ。」

学校の友達や他の教授が聞いたらビックリするだろうな、と思いながらも本題に入ることにした。こちらも朝の5時からこんな口喧嘩をするために起こされたのではたまったものじゃない。

「そうですね。で、何の用ですか。」

「佐倉の卒業論文のテーマってピポットの心理についてだったよな。」

「はい。そのつもりですが・・・何か問題がありましたか。」
なぜ、今その話なのだろうか。学校が始まってからでもよかったのではないかという疑問が浮かぶ。

「いや、問題っていうか・・・ピポット製造会社に勤めている奴がいてな。そいつと今まで飲んでたんだが、佐倉の論文テーマと自分の研究が一致してるから協力してほしいって言ってきてな。」

「はいい?!」

なんですと！それは・・・こちらからお願いしてもできぬことじゃないか!!

ピポットの情報など本やネットで調べてもどれも正確といえるもの

がなかった。国がピポット技術を保護し、一般にその情報は出回ることには少ない。そのため、どれも憶測で書かれているものがおおいのである。まして、今までにない「心」の部分で論文を書こうとしているのである。先行研究など全くないといってよい。秋山の話は由衣果の論文作成にあたりこの上ないものだった。

「まあ、返事なんて聞かなくてもお前ならやるだろ。だから、一応報告。詳しいことはまた今日の夜に話す。お前夜予定あけとけよ・オレのために。」

電話越しでもにやつと悪そうな笑顔を浮かべる秋山の様子が目に浮かぶ。

だが、そんなことは大目に見よう。なにせピポットの情報を直接得られるかもしれないのだから。

「がっちりばつちり、空けときます！！教授愛してる〜〜。」

「ばつ・・・てめつ・・・はあ。」

最後に盛大なため息が聞こえてきた。

おや、自分から言ったくせになんだか照れているらしい。こういふところは可愛いんだけどな〜。

「優等生の佐倉さんが思わず叫んでしまうほど、僕にそんな熱い想いを抱いていたなんて知りませんでした。生徒の想いを無下に断るわけにもいきませんし・・・。」

いつもの似非紳士モードに切り替えて話してきた。あっこれはマズイ・・・気がする。

「きよ、教授。あの・・・。」

「うっかり、他の生徒にあの佐倉さんから告白されたなんて言っち

やったら・・・大変ですね。」

くそう、似非スマイル。そんなことしたら・・・面倒くさいじゃないか。

「すみませんでした。調子に乗りました。ごめんなさい。」
早口でとりあえず謝る。平謝りするに限る。

「わかればいいですよ。じゃあまた夜に。」

ツーツーツー。

由衣果にはまたしても秋山の黒い笑みが頭に浮かんできたのであった。

きっかけ1 (後書き)

秋山教授登場。なんだか長くなってしまいました。
秋山「似非紳士」

きっかけ2

「紹介するな。こいつが電話でいった俺の友達^{ダチ}。」

「折原誠^{おじはらせいじ}」です。よろしくね。」

「佐倉由衣果です。よろしくお願いします」

「さっそくなんだけど・・・本題にはいつていい？」

秋山教授の友達が働いているという研究所につれてきてもらい、簡単に自己紹介をしたが自分が何をするのか全くわかっていなかった。

「あの～本題と言われましても・・・ピポットの心理に関することで協力してほしいと秋山教授から話を聞いているだけで、詳しいことは何も知らないんですが・・・」

「うん。もちろん、今から説明するよ。でも、協力してもらう前に一つ確認しておきたいことがあるんだ。いいかな？」

「君は、ピポット・・・いや、機械が感情をもつなんてことはあると思うかい？」

その質問は私をどきつとさせるものだった。ピポットという機械が街に当然のように溶け込んでいる現代で、ピポットが人と接しているのを見たとき、常に私が疑問に思ってきたことだった。「ピポットはあれだけ人と関わってるのに、感情は生まれないのだろうか」と。

だから、正直に答えることにした。この人がピポットをつくった技術者であっても。

「私は・・・あると思います。知識がないんで上手く言えないですけど・・・今のピポットは本当に人間のように自ら考えて自分で判断し行動できる。考える力があるのに、そこに自分の感情が生まれないなんて、おかしいと思います。確かに、たくさんの情報から、どれが正しいか分析して答えを出すことはできます。でも、人間の中でたくさんの人と関わりあって感情が生まれないなんて・・・ないと思います。いや、違うな。感情が生まれないなんて・・・さびしいんです。だからきつと私の願望だけど、感情をもっていてほしいって思います。」

そう、だから私はピポットの心理を研究したいと思った。人間の道具として働くだけなんてさみすぎる。見た目は人間と変わらないのに・・・

「そうか・・・それを聞いて安心したよ。機械に感情なんてもたせちゃいけない、もつわけがないって人には協力してもらいたくなかったからね。」

「えっ・・・それはもしか今のが面接みたいになってたんですか？」
間違った答えだったら、ピポットの研究に協力できなかったってことですかー!？」

「うん。」いやいや、語尾にハートをつけられても・・・。

「僕は今、ピポットに感情を持たせる研究をしているんだ。それで先日感情を発達させたピポット1号が完成した。構造としては完璧だったはずだった。しかし、1号は一向に感情を表してくれないだから、経験が必要なんだと思った。しかし研究所には、男手ばかりで作ることに没頭している奴ばかりだ。楽しいことを教えるやつなんていなかった。そこで、君だ。」

なるほど、困り果てていたところに秋山教授からピポットの心理を研究したいという学生がいることを聞いたのか・・・。

「この子に感情を教えてやってくれ。ナンバー001。おいで。」
折原は優しい表情で無線に話しかけた。しばらくすると向こうの扉から1人青年がはいってきた。背が高く、ひよろつとしている。前髪で隠れて顔の表情は見えない。

「初めまして。感情・・・発達・・・ロボット・・・001で・・・す」
ただたどしい自己紹介ではあったが、口をひらいてそう言った。

「初めまして。わたし由衣果っていいいます。よろしくね。」

「……よろしく？」

「……」

「……」

だめだ。限界だ。沈黙が重い。

話には聞いたけど、なんでこの子こんなに暗い顔してるの。
無表情っていつてしまえばそれまでだけど、もう見てられないわ。

「……あーもう！暗すぎるわよ。あんたその名前がいけないんだわ。今度からあんたは^{イチ}吉よ。名前を聞かれたら吉って答えなさい！もう名付けちゃったんだから。あんたのことは責任もって私が面倒みるわ。絶対に楽しくさせてやるんだから、覚悟しなさい！！」

やっちゃった。大きくでちゃった。まだそんなこと正式に決まったわけでもないのに。
ううう……だってほっとけなかったんだもん。つい裏の顔を出してしまうほどに。

由衣果は自己嫌悪に陥り落ち込んでいたが、その様子を見ていた吉が小刻みに体を揺らしていた。研究所の空気が一変した。

「ふふ……よろしく……ユイカ」

そうして、吉は初めて笑ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9371q/>

ピポット

2011年10月8日18時25分発行